



名古屋大学 大学院情報科学研究科
 附属組込みシステム研究センター
 Center for Embedded Computing Systems, Nagoya Univ.



「遠方に拠点がある会社の人が参加する研究会をある時期、頻繁に開催したのですが、Webexの効果を実感しました。」

— 名古屋大学 大学院情報科学研究科 附属組込みシステム研究センター ディレクター 手嶋 茂晴 氏

WebEx Meeting Center を使い、遠方にある企業との共同研究会議を円滑に開催



業種
 教育・研究機関

WebEx アプリケーション Meeting Center

概要

名古屋大学大学院情報科学研究科附属組込みシステムセンターは遠方にある企業と WebEx を活用し共同研究会議を開催。その際に作成する議事録を共有画面で直接、修正・訂正し、双方のファイルの相違や認識のズレを防止。さらには、WebEx で資料を共有することにより大学内で行う講演時にロスとなっていたモニターケーブルの付け替え等の時間をカットすることも検討中。WebEx の新しい利用方法を発見する名古屋大学の今後に注目したい

国立大学法人 名古屋大学について

業務内容

教育と研究

本社所在地

愛知県名古屋市千種区不老町

従業員数

役員 8 名、職員 3,341 名

WebEx 導入：2006 年 8 月

国立大学法人 名古屋大学は、開学以来 60 年ほどの歴史の中で自由闊達な、批判精神に富む学風の中から、野依良治特別教授のノーベル賞に代表される輝かしい研究・教育成果を挙げている。さらに、社会の一員として教育・研究の他に立地する地域社会の文化、政治、経済、産業等さまざまな課題の解決や将来の発展に向け、地域市民、行政、企業等と連携を図り、「ものづくり」に実現させる風土の中、「ことづくり」(卓越した研究成果)を通じた「ひとづくり」(勇気ある知識人の養成)に励んでいる。

導入前の課題

大学院情報科学研究科附属組込みシステム研究センターでは、企業との共同研究を一つの柱としている。様々な企業と会議を開催する際に、直接面会しミーティングを開催していた。関東を拠点とする企業も参加することもある。その際、出張を行わずにミーティングを開催することを検討していた。

導入の結果

導入検討時にはメンテナンスを考慮し、常に最新のバージョンを使用することが出来る ASP (SaaS) で提供されるサービスの利用に決めていた。「アメリカにおいて WebEx はある意味、それ自身が Web 会議を意味する言葉として通用するブランドでした」と手嶋教授は言う。自身がアメリカに居た際にデファクトスタンダードであった WebEx を使用していたこともあり、WebEx を 2006 年 8 月から導入する。

「日本では電話会議をする文化が無いので、企業が必ず機器を持っているわけではないんです。」と手嶋教授は語る。実際、日本では電話会議を行う企業は少ない。そのため、WebEx を共同研究へ導入

するにあたり、企業側がミーティングに必要なインカムなどの機器を用意する必要があった。更に新しいツールとして WebEx を利用するのに、企業側は多少戸惑いもあったが、ミーティングの回数を重ね、WebEx の画面上で注釈機能を利用しての効率的なコミュニケーション等により、ツールとしての利用価値を見出すと心配も解消され利用頻度が増した。

導入後の効果

「遠方に拠点がある会社の人が参加する研究会をある時期、頻繁に開催したのですが、Webex の効果を実感しました」と手嶋教授は語る。名古屋から関東への出張費を削減し、さらには双方の時間のロスを最小限にすることが可能となった。また、ミーティングの際に作成する議事録を WebEx 上で共有し、そのファイルに直接訂正を行うことで、双方が所有するファイルの相違も防いでいる。導入後、共同研究の研究員達における利用時にも、編集権限や注釈権限を他メンバーへ付与する際の設定で多少の戸惑いはあったが、大きなトラブルは見受けられなかった。そして、ミーティング回数を重ねるうち、共同研究を行っている各技術者の間でも良く出来たシステムであるとの一定の評価を得る。

また、Linux 系アプリケーションの Windows マシン上での画面共有といった独自の使い方も行った。その方法は、Linux マシン上で X Window Client となっているアプリケーションを動作させた後、Windows マシン上で WebEx のデスクトップ共有機能を使い X Window Client を他の WebEx の参加者と共有するという方法だ。

今後の展開

「同じ会議室の中で WebEx を使用することを検討しています。」と手嶋教授は語る。プロジェクターやプラズマディスプレイを使った講演を発表者がおこなう際、モニターケーブルなどの付け替えに時間を要してしまう。発表で使用する資料等を WebEx で利用することにより、この時間のロスをカットすることが可能になる。さらには、資料のページ変更や、注釈等を他の学生がおこなうことにより、発表者は発表に専念することが可能であろう。遠隔で利用することとは異なる、新しい利用方法である。現在は、始動に向け権限の設定やアカウントの追加を検討中だ。「学生は使い出せば、かなり使うことが多くなると思います。」と手嶋教授は言う。

名古屋大学 大学院情報科学研究科 附属組込システム研究センターでは、今後、研究センターならではの技術と WebEx の利便性をプラスし、シナジー効果を生み出していくであろう。さらには遠

隔地のみならず同じ会議室内で WebEx を活用するなどの全く新しい利用方法を今後も発見・利用し、企業との円滑なミーティングを行うこと等により、さらなる研究成果を築き上げていこう。今後、WebEx を導入した名古屋大学での利用方法に注目したい。

ハイライト

- 出張が必要だった遠隔地にある企業とのミーティングに WebEx を利用することにより、経費を削減。
- ミーティングの際に作成する議事録を WebEx 上で共有し、直接、そのファイルを訂正することで、双方所有のファイルの相違も防止。
- 同じ会議室内であっても、WebEx で発表時に使用する資料を共有することにより、各 PC に繋ぐモニターケーブルの付け替えに必要な時間をカットすることを考案。